

エッセイコンテスト 1 等賞

「フランス語とわたし」

後藤好子

フランス語との出会いは 1999 年 1 月、今から 20 年近く前のことになる。当時、私は法律専門図書館の洋書部門で働いていた。そこでは主に英語、ドイツ語、フランス語で書かれた図書を扱っていたが、私は、大学の第二外国語としてドイツ語学習の経験があったため、英語とドイツ語を担当していた。フランス語は 50 代の男性が一人で担当しており、私はそれを未知の言語として遠巻きに眺めていた。「小文字が多く、一つの単語の文字数が少ない」というのが、私が初めてフランス語を見たときの印象である。ある日、「もし余裕があるのなら、フランス語も勉強してみてもどうか。」と隣席の先輩に言われたことがきっかけになり、アテネ・フランセの門を叩くことになった。

それから、週 2 回、仕事帰りに入門クラスに通い始めた。フランス語を学び始めてすぐに、私は、その音の美しさに魅了された。それと同時に、口腔母音が 12、鼻母音が 4 もあると知って驚いた。担当して下さった先生が音声学に精通されていたため、丁寧な発音指導を受けることができたのは幸運だった。授業には必ず鏡を持参しなければならないという徹底ぶりだったが、最初に正しい音を身につけたことで、その後、発音で苦勞することはなく、どれほど感謝してもしきれない思いである。

勉強を始めて一年くらい経ったところに転勤があり、図書館の仕事からは離れることになってしまったが、私にとって、フランス語を学習すること自体が楽しく、夢中になれるものであったため、学習をやめようとは思わなかった。2001 年にグルノーブル大学夏期講座研修旅行に参加したことも、その後の学習継続につながる貴重な経験になった。

数年前から、日本文化をフランス語で紹介することに興味を抱くようになり、昨年、全国通訳案内士の資格を取得した。伝統文化だけでなく、ポップカルチャーなど、ありのままの日本を紹介していきたいと思っている。2019 年にはラグビーワールドカップ、2020 年には夏季オリンピック・パラリンピックが日本で開催されることもあり、世界中から訪れる人々を笑顔でお迎えしたい。

齋藤晴比古先生の「ドクトゥール白ひげ 対フランス交流記」を拝読し、齋藤先生とフランスとの交流に一つの理想の形を見た。それは、双方の心のこもった温かい関係であり、一人一人の顔が見える確かなつながりである。このような交流を広げていくことこそ、地球上のあらゆる争いをなくす一番の方法だと感じている。私も一人の民間外交官として、世界中の人々と温かい交流を続けていきたいと思う。最近、街中でフランス語を話す旅行者を見かけることも多くなった。「ようこそ日本へ。楽しんでますか。」と勇気を出して話しかけてみたい。